セカンドステージ

海外で人気のトランプゲーム

ブリッジでつながる世界

外国人との交流も楽しく

ブリッジは手札の推理が魅力だ（2日、東京都渋谷区）

欧米やアジアに愛好者が多い「コントラクトブリッジ」が日本でも静かなブームとなっている。海外駐在などに伴いゲームを覚え、定年で余裕ができたのを機にじっくり楽しむ人が多い。訪日外国人との交流や旅行先でのふれ合いに役立つのも魅力となっている。

4月上旬、米カリフォルニア州からの観光客、スティーブン・ドラッカーさん（72）は東京都渋谷区の「渋谷ブリッジセンター」を訪れた。地元で週に3回はプレーしているブリッジを「日本でもぜひやってみたい」と考えたからだ。

ブリッジは4人が2組のペアに分かれて遊ぶトランプゲームだ。ドラッカーさんのペアは同目黒区の舩越玲子さん（59）に決まった。ゲームは「ワン・スペード」など簡単な英語を使い進む。

半日ほど遊んだドラッカーさんは「良いパートナーに恵まれた」と満足げな様子だった。十数年前のマレーシア在住を機にゲームを覚えた舩越さんも「海外の人とすぐ友達になれる」とゲームの魅力を語る。

ブリッジは日本人になじみのある「セブンブリッジ」とは異なる。味方ペアが向かい合って座り、1人4人が1枚ずつ強いカードを13回続に13枚ずつカードを配る。を競う手合わせを13回続け、7回以上制したペアがゲームに勝つのが基本ルールだ。

味方や敵の手札を推測し、手札の強さに応じて1回のゲームで獲得できる点数を取り決める（コントラクト）のも醍醐味といえる。数十人が対戦相手とテーブルを変えながらペアで獲得した点数を競うリーグ戦もある。すべてのペアが必ず一度は同じ手札でプレーする仕組みがあるため運に左右されにくい。推理力などの技術がものをいう。

愛好者による日本コントラクトブリッジ連盟の会員数は2017年度に7600人と過去20年で2割ほど増えた。渋谷ブリッジセンターの寺本直志マネジャーは「練習を重ねるほどうまくなるので、熱を入れる中高年が多い」と話す。

16世紀の英国発祥とされるブリッジは、世界で約1億人の愛好者がいるといわれる。日本でも裾野が広がるのは、駐在員や同伴する家族として海外に滞在する人が増えているためとみられる。海外在留の邦人は16年に134万人と過去20年で1・8倍に増えた。「現役時代に海外でルールを覚え、時間ができたのを機にブリッジを本格的に始める人が多い」（寺本氏）

ゲームを覚えると、海外旅行の楽しみも増すようだ。ドラッカーさんとペアを組んだ舩越さんはベトナムなどでゲームを楽しんだ。「仲間がハノイのまちを案内してくれたこともあった」（舩越さん）

8月にインドネシアで開かれるスポーツのアジア大会にはブリッジが知的遊戯として唯一、正式種目に入った。日本代表も出場する。20年の東京五輪を機に訪日外国人はさらに増えると見込まれ、交流の手段として注目を集めそうだ。

（高橋元気）

連盟会長 細田氏に聞く

男女問わず 老化防止に

1人でも夫婦でも

日本コントラクトブリッジ連盟の会長を務める細田博之衆院議員（74、写真）はブリッジ歴が半世紀に及ぶという。ゲームの魅力などを聞いてみた。

――ブリッジはいつ始めましたか。

「通産省（現経済産業省）に勤めていたとき、先輩に教わった。現在は月に2回ほどプレーする。3月末に高松市で開かれた大会では優勝した。強いメンバーが集まっていたから珍しいことだ。だから自慢している」

――魅力は何ですか。

「まずは手軽に楽しめることだ。東京周辺であれば10カ所ほど会場があり、男女問わず人が集まっている。戦績が点数で記録され、点数がたまると、囲碁や将棋で段位が上がるのと同様にうれしくなる。私は囲碁に置き換えれば二段くらいだ」

「1人で始めるのもいいし、ペア競技なので夫婦で参加するのもいい。時にはけんかしながらやっている夫婦もいて、見ていて楽しい」

――駆け引きや記憶力が大切と聞きます。

「老化防止にもなる。知的要素が強く、海外では（米マイクロソフト創業者の）ビル・ゲイツ氏らも愛好者だ。私は上達しないゴルフよりブリッジのほうが好きだ」

――カジノ推進の立場のようですが、本音はブリッジ振興ですか。

「以前にそんなことを国会で問われたときは『カジノの経験はほとんどない。ブリッジのように努力しただけ報われるようなゲームのほうが好きだ』と答えた」